

ラテンアメリカ出身日系人にとっての日本留学の特徴と長期的成果

—元留学生への聞き取り調査から—

国際機構 国際教育交流センター

田 中 京 子

要旨：

本稿では、日本留学を1年間以上経験してから、約10年～50年が経過したラテンアメリカ出身の20名の日系人元留学生を対象とした、留学の長期的成果についての聞き取り調査の結果を分析し、日系人の日本留学の特徴とその長期的成果について考察した。

居住地で各自が持っていた日本人意識の濃淡によって、日本留学への期待は異なっていたが、ほとんどの日系人留学生が来日後、自己のアイデンティティーについて葛藤を経験した。多くの女性元留学生の場合は、受け入れ社会から差別を受けたと感じる経験があった。留学後10年以上が経過し、元留学生たちは、留学経験のある日系人として出身地や日本、または第三国で仕事や生活をしている。留学中の経験によって、日本社会や日本人に対して批判的な立場をとるようになった元留学生もいるが、それでもすべての元留学生が日本のよい面を次世代や周りの人々に伝えようとしている。留学時代に受けた恩恵を今度は自分が返す番であるとして、日本から来る学生等を支援している人もいた。

調査結果は、今後の日本における多文化理解や国際教育交流について、興味深い課題を示唆している。

キーワード

日本留学, 日系人, 留学成果, 南米日系人

目次：

1. はじめに
2. 研究の目的
3. 分析方法

4. 対象者の概要

5. 結果

5-1. 考察結果図

5-2. 考察結果図の説明

5-3. カテゴリー別概念とその定義, 具体例

6. 今後の課題

1. はじめに

2018年5月1日の統計では、日本の高等教育機関に在籍する留学生298,980人のうち、ラテンアメリカ出身の学生は0.5%の1,546名であった（日本学生支援機構：2018）。そのうち日系人が占める割合は正確にはわからないが、筆者による留学成果に関するこれまでの聞き取り調査に参加したラテンアメリカ出身元留学生約100名（ほとんどが元文部科学省の国費留学生）のうち4分の1程度が日系人であった。日系人のみを対象としたJICAの日系研修員プログラムや、県費留学制度等があることを考慮すると、日系人留学生は決して少なくないと言える。自らも日系人であり日系社会情勢に詳しい松本（2008:3）は、毎年200名ほどのラテンアメリカ出身日系人が留学制度を利用して日本に留学していると述べている。

ラテンアメリカ出身日系人留学生の日本留学の経験やその成果活用には特徴があることが示唆されている¹。それらの特徴は日系人自身の意識や行動に関わるだけでなく、受入側社会の特性とも関わっているようであるが明確にはなっていない。彼ら日系人の日本留学にはどのような特徴が見られるのであろうか、そこにはどんな要因や環境が影響しているのであろうか。

¹ 松本（2008）やTanaka（2003：57）など

2. 研究の目的

本稿では、ラテンアメリカ出身の日系人²の日本留学における、留学への期待、留学中の経験、留学成果の活用や波及について、その特徴と、影響を与える要因・環境を元留学生への聞き取り調査の結果から検討し、ラテンアメリカ出身日系人にとっての日本留学の長期的成果の一端を明示することを目的とする。留学当時と現在では社会の状況も留学の質も異なっているが、共通点や相違点を考慮したうえで、日本の高等教育において今後も推進されていく留学交流や国際教育交流への示唆を得る。

3. 分析方法

ラテンアメリカ出身者を対象に日本留学の長期的成果について筆者が行なった聞き取り調査から、日系人対象の調査記録を選び、「自分の(祖先の)国日本」「自分のアイデンティティ」「日系人としての自分」等に関わる記述を抽出し、生のデータから概念を生成して特性を理論化していく「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」(木下2007a, 2007b)を援用して、概念を生成しカテゴリーに分けて、概念間の繋がりを考察する。

4. 対象者の概要

筆者は2007年から2016年までの間に、各国元留学生会等の協力を得て日本を含む12カ国で、ラテンアメリカ出身の元留学生(原則として、日本に1年以上留学し、修了後10年以上経た人)約100名を訪問し、留学の成果について聞き取り調査を行なった。そのうち25名が日系人(幼少時に日本から移住した一世、または現地で生まれた二世、三世)であった。

本稿では、日系人25名のうち録音等の条件が揃い詳細な記録が残せた20名を調査対象者とした。

留学時期および出身国

表1の通り

留学時の受給奨学金

文部省奨学金：17名、祖父母や父母の出身県の県費：3名

性別

男性：11名、女性：9名

面接時の主な使用言語

日本語：9名、スペイン語：8名、ポルトガル語：1名、日本語とスペイン語両方：1名、日本語とポルトガル語両方：1名

表1 対象者の留学時期と出身国・居住国

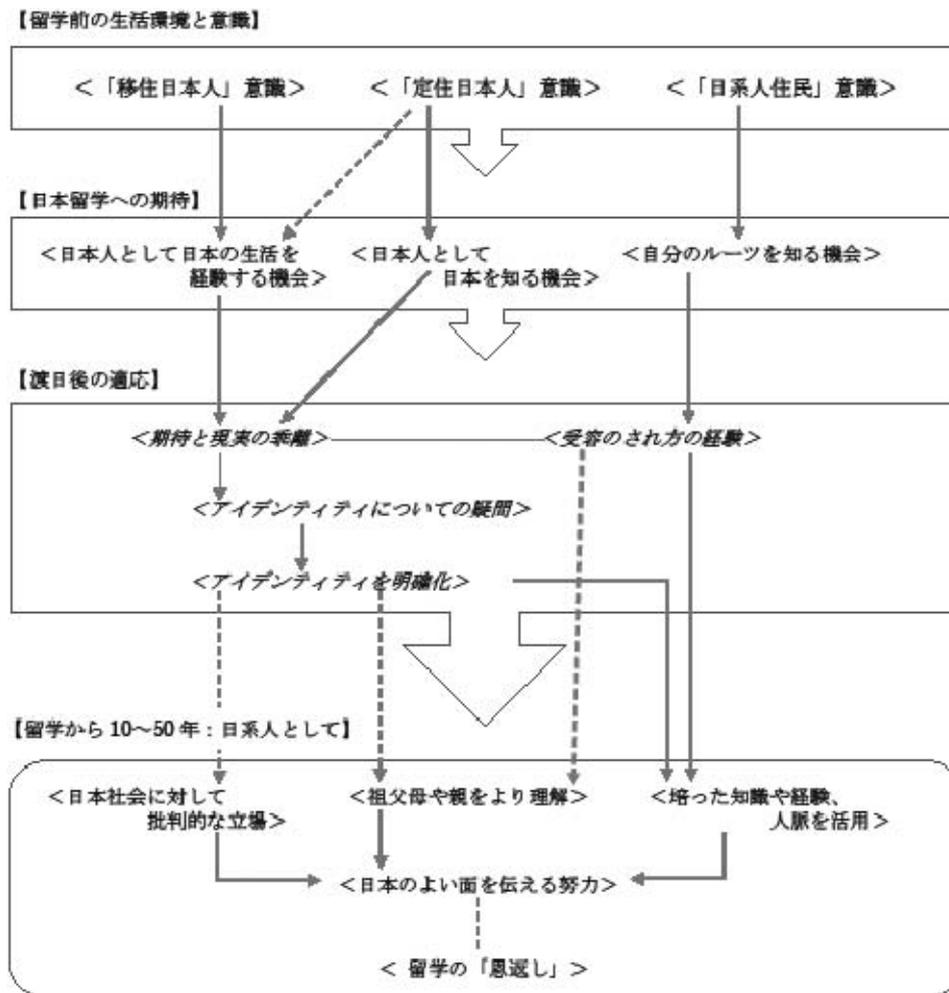
個人識別文字	日本留学時期	出身国(現在の居住地が出身国以外の場合の居住国)
A	1965-1967	ブラジル
B	1968-1971	日本(幼少時からアルゼンチン)
C	1972-1978	日本(幼少時からブラジル)
D	1975-1978	ペルー
E	1975-1980	アルゼンチン
F	1977-1979	アルゼンチン
G	1978-1981	ペルー
H	1979-1982	アルゼンチン
I	1981-1984	ブラジル
J	1981-1982	ブラジル
K	1982-1983	ブラジル
L	1988-1989	アルゼンチン
M	1989-1990	アルゼンチン
N	1990-1992	アルゼンチン(日本)
O	1992-1993	ブラジル(カナダ)
P	1993-1995	パナマ
Q	1994-2000	アルゼンチン
R	1995-1996	メキシコ(スペイン)
S	1994-1996	ブラジル
T	2006-2010	ブラジル

² 日系人はラテンアメリカ以外の地域にも居住し、日本にも留学しているが、本調査は筆者が聞き取り調査において言語的に十分対応できるラテンアメリカ出身の日系人を対象としている。

5. 結果

5-1. 考察結果図

〈 〉は生成された概念を， - … →は概念間の繋がりを，【 】はカテゴリーを示す。



5-2. 考察結果図の説明

対象者の留学前の生活環境や意識は3種類に分けられる。すなわち、1) 居住国の「移住地」に住んで就学年齢までは日本人移住者とだけ接し、日本語を母語として育った場合。就学年齢以降は移住地外の人と接して居住国の言語も学ぶが、日本語補習校に通い、日本社会の延長に暮らす「移住日本人」意識を持っていた。2) 移住者である祖父母や父母のもとで、居住地の人々とも接しながら育った場合。「日本人」と地元の人とは自他ともに区別し、日本語や日本文化を伝承しながら「定住日本人」意識を持って育った。3) 移

住者である祖父母が地元の人と結婚するなどにより、地元の人々とほぼ同様に育った場合。日本語は挨拶程度を解すのみで「日系人住民」意識を持って育った。

日本留学は、1) や一部の2) の対象者たちにとっては、〈日本人として日本で生活する機会〉であり、多くの2) の対象者には〈日本人として日本を知る機会〉と捉えられた。そして、3) の対象者たちにとっては〈自分のルーツを知る機会〉として捉えられた。

実際日本に来て見ると、1) や2) で日本文化を伝承していた多くの対象者は〈期待と現実の乖離〉に驚き、苦しんだ。実際の日本語や日本文化は自分が学ん

だものと大きく異なり、日本で生活するには知識も言語能力も不足していた。(一方、日本との関わりをあまり持たずに生活していた3)の対象者にとって、日本の生活は外国人としての新しい経験であった。)

対象者のうち、女性の多くが日本社会で差別を経験したと感じている。逆に日系であるがため利点があったと感じる男性対象者がいた。〈受容のされ方の経験〉はその後の日本社会への姿勢に影響を与えている。

自らを日本人だと意識していた対象者たちには「自分は何者か」という〈アイデンティティについての疑問〉が大きく立ちほだかり、日本への適応は大きな挑戦であった。様々な努力や工夫をして、それぞれの対象者が自らの〈アイデンティティを明確化〉していった。日本人性を強く感じる人、「日系人」「ミックス」「ダブル」など混交を意識する人、居住地住民としてのアイデンティティを強くした人、または地域に関わらず一人の人間として自身を捉えるようになった対象者もいる。

すべての対象者が、現在では、日本留学経験を持つ日系人として、〈培った知識や経験、人脈を活用〉して仕事や生活をしている。居住国に進出する日本企業や駐在日本人のために働く、日系コミュニティーで活躍する、居住国と日本と共同の公的事業を担う、第三国で日本の芸術普及に貢献する、などである。また、日系社会を改めて考えて〈祖父母や親をより理解〉するに至った場合も多い。

留学時代に差別を受けたと感じている対象者は特に、当時の日本社会の閉鎖性や居住国における現在の日本人駐在員の言動を疑問視し、〈日本社会に対して批判的な立場〉をとっている。

それでもすべての対象者が日系人として、日本語や日本の価値観など〈次世代に日本のよい面を伝える努力〉をしている。日本社会に批判的な立場をとる対象者も、忍耐や規律といった価値観は伝えたいと考えている。

留学時代に受けた奨学金など様々な恩恵を、今度は自分が〈留学の「恩返し」〉として与える番だと感じている対象者もいる。毎年日本から留学生を呼び奨学金を支給したり、日本人留学生や訪問者をホームステイで受け入れたりしている。

5-3 カテゴリー別概念とその定義、具体例

上記の説明について、生成されるに至った概念の定

義と、具体例を示す。スペイン語またはポルトガル語での発話は筆者が日本語に翻訳した文章を、「」内に記す。個人の特定を避けるため省略する箇所は○で、短縮のための省略は…で示し、文脈理解のために必要な説明は〔〕内に記す。可能な場合には、発言の後に表1の対象者A～Tを示す。

5-3-1 カテゴリー【留学前の生活環境と意識】

〈「移住日本人」意識〉

居住国の「移住地」と呼ばれる場所に住み日本語を母語として育ち、就学年齢以降は居住国の言語も習得するが、日本人として育った。

「あの頃はそうですが、日系の家庭では、もう生まれたときから日本語。まず日本語をやれという、覚えてですね。そして小学校のころになって、ポルトガル語を習ったのですよね。まあ、私のうちもそうでしたけどね。」A

「我々は日常は日本語で生活していた。〔育ててくれた〕おじさんがものすごく理解ある人で、読みたいものは何でも読ませてくれた。本当に貧乏をしていたけれど、『少年クラブ』は買ってくれたし…」B

「日本語を親に、まあなんといいですか、厳しく言われて。…どうしても兄弟の会話はポルトガル語になってしまうんですが、親はそれを聞きつけると怒って、家の中ではポルトガル語じゃだめだと。」C

「小学校1年生で入学するまでは、片言もスペイン語を話せなかったんです。」D

〈「定住日本人」意識〉

居住国に定住して日本人としての意識を強く持って暮らしていた。

「〔実家では〕ペルー人と日本人の友達を区別して教えられました」G

「〔出身国では〕ずっと『あなたは日本人、日本人、日本人』って。アー、私日本人。」P

「〔出身国〕では、日本人やその子孫が多くいる町に住んで、自分は日本人だと思っていました。」O

「〔出身国で使われていた〕外人と日本人の言葉ね、それがよくわかった。」J

「祖父は…ポルトガル語で何か話しかけると無視されて、そういうスバルタ教育だった。」K

〈「日系人」住民意識〉

居住国の住民として暮らし、祖父母の出自を自分のルーツとして意識している。

「私は日系人です。… 私の本当の名前は〇。…おじいさんは日本人でした。私は全然会いませんでした。… 彼は私が生まれる前に亡くなりました。」 P

「父方の祖父は早く亡くなり、会えませんでした。他の祖父母は日本語交じりのポルトガル語を話していました。〔日本〕文化や伝統など守ってきたことありますが、ブラジル風になっていたと思います。」 S
「親戚は、ポルトガル語よりも日本語のほうを多く話していたので、自分も日本語を多く聞いて育ちました。私は彼らにポルトガル語で話して、彼らは日本語で話す、という具合です。」 T

5-3-2 カテゴリー【日本留学への期待】

〈日本人として日本の生活を経験する機会〉

日本人として、日本留学は自然な機会として捉えた。専門知識を深めたり生活経験したりする機会であった。

「就職して1年ちょっとですね、その文部省の留学制度ですね、に応募したら通ったんですけどね。」 A

「私は日本に遊びに行くからと本当のことを言っちゃって。…我々が出た時期というのはまだ日本のアカデミックなバリューというのはみとめられていなかったからね。」 B

「〇年〇月に〔ブラジルの大学を〕卒業したんですけど、翌年の10月に日本に行ったんですね。で〇大学に入れていただいて…」 C

〈日本人として日本を知る機会〉

居住国で日本人として定住していたため、日本に実際に行って直に日本を経験したかった。

「奨学金を得られたことは私にとって素晴らしいことでした、日本を、お父さんとお母さんから聞いてきたこともしっかり知っていたから。」 L

「1960年代からアルゼンチンは豊かでしたが、日系人として日本留学したかったのです。」 E

「日本というのは私の夢で、子どもの頃からの夢で、どうしても行きたかったところなんです。」 K

「〔出身国では〕日本人を見ると冗談にハイルヒットラーとか。… まあ、勿論ドイツと日本は同じ」 M

〈自分のルーツを知る機会〉

居住国の住民として育ち、日本にある自分のルーツに興味を持った。

「〔祖父母や親戚の影響で〕小さい頃からいつも日本に行ってみたくて思っていました。ブラジルでは学部生の2年生から日本語の勉強をして。」 T

「おじいさんは日本人でした。… 彼は私が生まれる前に亡くなりました。…〔日本で〕親戚が生きていた。… 老人ホームで彼女と会って、彼女はすっごく泣きました。」 P

5-3-3 カテゴリー【渡日後の適応】

〈期待と現実の乖離〉

日本や日本語への期待が大きいほど現実とのギャップに驚き、時には苦しんだ。

「知っていると思っていた文化は、実は新しいもので、苦しみでもありました。」 F

「実際行ってみたら… 私の両親から聞いた話の日本とは全然違う。」 P

「〔出身国で〕学問的に厳しい訓練を受けてきたので、日本は物足りなかった」 N

「〔父から〕日本では年長者が敬われると聞いていましたが… 東京に行ったら路上に寝ているお年寄りたちがいたのです。アメリカ合衆国というホームレスみたいな。」 L

「自分は〔日本語を〕ある程度できると思って来ているわけですよ。でも日本に来てテレビを見たり雑誌を見ると読めないし分からないのですよ、ああ、自分は何にも知らないのだと。」 N

「分かったのは、日本人の言葉は止まらず、時代とともに進んできたけれど、ブラジルの日本人の〔日本語は〕はなんか止まったっていう感じがするね。… コロニア語って言われていますよね。」 J

「私たちが話す日本語… ナチュラルじゃなくて、でこぼこがあつて。」 R

〈受容のされ方の経験〉

対象者のうち多くの女性が、日本社会で、女性としてまたは日系人として差別を受けたと感じている。逆に、日系人であることが利点であったと述べる男性対象者もいた。

「日本で日本人と同様に扱われるかといったら、全然それがなくて。」 M

「日系としてなのか女性としてなのかわかりませんが、本当に日本では非常に差別されていると感じました。」「アルゼンチンに帰ったのは、または少なくとも日本を出たのはとてもよい決断でした。」 Q

「こういう顔して、日本語もちょっとできているけど、日本人じゃない。… どうしてこの子は、普通の日本人の行動をとらないのかと、腹を立てるんです。怒っちゃっていじめるんです、私を。」 R

「[大学のクラスでは] 24名のうち日系5-6名だったですね。… それでなぜ、同じ血を引く日系がひどい扱いされるのかな、みたいな。… 差別のランクもあって、ラテン、南米っていえば最後、一番下で、日系というとさらに下というようなランク。… 知ってれば『何で知ってるか』、知らなかったら『何だそんなことも知らない』とか言われて。」「冗談に日本人恐怖症になったとか言ってたぐらいです。」 M

「[日本では] 女性だと2倍、そして二世だと3倍困難が伴います。私は怒りで髪が抜けて、4月に[日本に] 行って5月には体重が8キロも減っていました。」 D

「[研究所では給茶機の] ボタンを押すだけの仕事をさせられたので先生になぜかと尋ねると「一番簡単な仕事だから」と言われました。研究員のほとんどが男性で… マチズムがあったと思います。」「ある時先生から『大学も卒業したし、次は結婚準備ですね』、と言われました。」 O

「日本において日系であること、[日本人の父とアルゼンチン人の母を持って] ヨーロッパ系アジア人であることは利点でした。他の『外人』よりは親しみを持ってもらえるが、日本人ではない。外国人としての利点と日本人の血を引くことでの利点とを持っていたと思います。」 F (男性)

〈アイデンティティについての疑問〉

自らを「日本人」と意識していた対象者たちすべてが、日本留学によって「自分は何者か」という疑問を持った。

「国では日本人だから違う扱いする、で今度日本に行けば日本でまた差別される。そうすると結局、私たちは何でしょう。というアイデンティティの問題で、最初のうちは結構悩まされた。」 M

「やっぱり我々、日系の育った人っていうのはいわゆ

る半分半分なんですよ、… それでまあ、いろいろあの、自分はいったい誰なんだろう、というね。… そういう葛藤があったんじゃないかと思うんですけどね。」 I

「[ブラジルでは] 自分は日本人だと思っていました。でも日本に着いて、見た目は全部日本人なのにいろいろなことが分からなかったのです。」 O

「自分は日本人だと思って日本に行きましたが、日本人でもペルー人でもない何か不思議な存在だと感じて、大きなショックを受けました。」 D

「[日本で] 私はいったい何者か、と。…もしアメリカ合衆国に留学していたらこれほどの衝撃はなかったことでしょう。」 G

〈アイデンティティを明確化〉

多くの対象者たちが、日本留学中に自らのアイデンティティをより明らかに理解した。

「やっぱり我々、日系の育った人っていうのは、いわゆる半分半分なんですよ。… だけどやっぱり、突き詰めていくと、やっぱり自分はそのね、日本人的なところがあるっていうかね、考え方。」 I

「[日本で] 人生変わりました。… 日本からお友達が来ると、私はたまたまブラジルで生まれた日本人なのよって、言える立場ではないんですけど、そうありたいです。」 K

「日本へ行って初めて、ああ、私は日本人じゃないっていうことが分かった。…自分がどういう人であるかっていうのを日本へ行って、なんかそれがもう少し明らかになって、はっきりしたっていう、ね。」 J

「自分のアイデンティティを見つけました。半分ペルー人、半分日本人、知識は2倍」 D

「日本人ではなくて日系、両文化の混交なのだと、自分のアイデンティティを発展させることができました。」 G

「自分のアイデンティティ、真ん中、サンドイッチ。」 M

「[日本留学は] 自分が日本人の子孫ゆえに持っていた多くの混乱を解決してくれました。…今は日本人とは言えず、日本人の一部を持ったアルゼンチン人であることを理解し、自分にとって大切なことは日系としてではなく、人間として見分けることができるようになったのです。」 Q

「[この間] 日系人として、どんな国でも倒れたり、ま

た起き上がったりすることが理解できるようになりました。客観性というのが、アイデンティティを強固にするのです。」

「〔日本では〕自分探しのためにベネディクトの『菊と刀』や中根の『タテ社会の人間関係』、土井の『甘えの構造』を読んだ。今では地元でタクシー運転手に『日本人か』と尋ねられると『アルゼンチン人だ!』と答えている。」E

5-3-4 カテゴリー【留学から10~50年：日系人として】

〈培った知識や経験、人脈を活用〉

日本留学を通して深めた専門知識や日本語・日本文化の知識、人脈などを現在の仕事や生活に活かしている。

「○（日本の公的組織）のプロジェクトが3つあって…一応25年間ですね、私はカウンターパートナーとして勤めました。…やっぱり日本語ができるということですね。」A

「〔専門職の仕事の相手は〕大体8割が日本の企業でして、…やはり日本語で話しが聞きたいなということになって、私が日本語のできるので」C

「〔日本留学後日本で起業して〕いろいろな中南米関係の支援事業とかマーケティング調査とか〔をやっています〕。…やっぱり、ネットワークですよ。」
「〔大学教員として日本の学生達に〕中南米のもうちょっとこうおもしろさというのと自分が今まで見てきたもの…もうちょっと教えたいですね。…やっぱりあれだけ無秩序で、言うこときかない社会ないでしょう。日本と正反対ですからね。」N

「〔大学教員として〕私自身は、誠実であるべきとか、絶対うそをついてはいけないとか、自分には厳しくても、他人には寛容であれとかですね。…ブラジルの社会で、それをこの社会に真っ向から押し付けていることは絶対にできないわけですよ。…日系人というのは一歩も二歩も引いて引いて引いて…どこまで引くのか、それが難しいね。…まあ日本に行って自分が日本の文化に触れたこと、そういうことが、一番今自分がやっていることに反映されているんじゃないかと思うんですね。」I

「個人主義はだめだという、そういう考え方を〔日本で〕教えられたので、そこがすごく大切だと思うんですね。…僕だけじゃなくて、みんながよくなるよ

うな生活をしたい。…だからこの国をよくしたいと思って、こういう教育を子どもにね、できるだけ範囲の人たちに教えたいって…そういうことを今はしています。」J

「〔アルゼンチンは1980年代後半〕仕事を見つけるのが非常に難しかった。日本は景気がよくてバブル最盛期、建築ブームで専門人材を必要としていてラテンアメリカの日系の専門家に求人が多くありました。」H

「日系人として、ハイブリッドとして、〔自分のハイブリッド芸術作品を〕日本に持っていきたいですよ。おおい、世界にもこういう人たちいますよ、と。」R
「〔歯科医として〕こっちで日本人のコミュニティーに私のサービスをオファーします。なぜか日本人は時々スペイン語も英語もできません。」P
「いつも日本語とポルトガル語を繋ぐ〔仕事をしてきて〕、再来日した時また○（日本の都市名）の日系就労センターで仕事をしました。」O

〈祖父母や親をより理解〉

多くの対象者が、日本留学を経て現在の状況に至り、移住した先祖に感謝したり思いを馳せたりしている。

「〔留学成果を活かして地元で活躍できるのは〕日本人の顔を持つことが、ここアルゼンチンでは、働き者で誠実だという偏見があるからです。ここに来た父や〔移民の〕人々のおかげです。」L

「〔アルゼンチンから日本に留学した〕元留学生の多くが外国に行っており、アルゼンチンに〔戻って〕いる元留学生の多くは日系です。…親たちが努力してここに定住したことに感謝しているからかもしれません。」Q

「〔留学成果を活かしてブラジルで成功しているのは〕ブラジルの社会で日本人の評価、すごい、いいんですよ。…泥棒はいないしね、教育はされてるっていう…日系、我々のおじいちゃん、お父さんの考え方が大体一緒なんですよ。」J

「この日系社会というのは、まあいろいろな理由でアルゼンチンに移住してきて、すごく頑張ってるって働いて、すごいいい評価をされているんですよ。日本人だと働き者だとか、真面目だとか、嘘はつかないとか。」M

「なんでブラジルに来たのよと、祖父によく文句を

言ってたのよ。なんでブラジルに。一番遠いところに来ちゃって、どうするのよって。… ハワイとかあったじゃないって。…いろいろとあって、来たんでしょけどね、ブラジルに。」K

〈日本社会に対して批判的な立場〉

日本留学の経験を通して、日本社会や日本人に対して批判的な立場をとるに至った対象者たちもいる。

「〔日系人が〕せっかく評価をされているのに、〔駐在で〕2～3年しかいない人が変なことをするとね、そうするとその評価を下げる。…いろいろ見ているけど、同じ人種、国籍とかで、相手にいやなことをするとかいうのは、何か日本人だけみたいな感じ。」M

「日本へは、観光ならいいですが住もうとは思いません。…私と一緒に働いていた学生も〔日本に〕戻りたいとは思っていません。…日本では社会に統合されていると感じられないからです。…自由がなくて開放的ではないと思います。」O

「私たち（日系人）の場合は、日本はいつも遠いものとして見るんです。そういう存在になっちゃったんです、はい。いくら日本に行っても、日本に暮らしても。」R

「〔グローバル人材と言うのは〕英語とかまあ、そういうものも大事なだけけれどもね、英語はできて、交渉力、それから駆け引きする力・・・文化力ですよ。…日本って本当に強い力はたくさんあるにもかかわらず、それを活用していない。」N

〈次世代に日本のよい面を伝える努力〉

日本留学を通して、子どもたちにも日本語や日本文化を伝えようとしたり、子どもたち自身が興味を持って学んだりしている。

「娘は〔日本に〕3ヶ月行ってきて、そして帰ってきて国費留学生でまた2年〔日本留学しました。〕」B

「息子はバイリンガルの学校に行っています。スペイン語と英語、午後には日本語があります。娘達ももうすぐ行き始めます。…日本語を勉強すれば日本で勉強する機会もあり、その成果も大きくなるでしょう。」L

「息子は〔日本で〕小学校しか経験せず、日本の小学校は〔中学校より〕ずっと楽しいので、帰ってから日本語を勉強し続けて、〔日本語能力試験の〕一級を取りました。」H

「娘はマンガを通して日本文化に接しています。」E

「弟は〔日本の〕〇大学に…入れていただいて…妹は…〔日本の〕〇大学に留学させていただいて。」C

「子ども達には絶対に日本語で〔話し〕…家庭内、なるべく子ども達に日本の習慣とか礼儀作法を一応教えたいと思って。日本食もあまり上手ではないんですけど、できる範囲でつくったりして。そういう、日本に行っても生活に困らない程度のことは伝えたいんですけど、伝わっているのかどうかは分からない。」K

「できれば日本の文化をもっとね、できる範囲で、日本人だけじゃなくて、ほかの〔人達〕にもね、教えたいという気持ちですよ。」J

〈留学の「恩返し」〉

日本留学時代に奨学金等の恩恵を受けたことに対して感謝し、「恩返し」をしたいと考えて実行している対象者がいる。

「私としては、まあやっぱり少しでも恩返ししなきゃいけないというんで、日本からの留学生を毎年一人ここで養っているわけで、これが全部で30人になります。」C

「自分がお世話になった分のお返し、できるのかあというのがあって、それで、ホームステイもそういう気持ちで受け入れてるんですよ。」K

「日系人として家庭でも言われてきた例えば「恩返し」の大切さ。元留学生たちは日本に感謝していて、日本で学んだ価値を広めようと思っています。」G

6. 今後の課題

時代や居住環境によって程度の差があるとはいえ、ラテンアメリカの国々の多くの日系人が「日本人」としての意識を強く持ってきた³。今回の対象者である元留学生たちにとって、日本留学への期待は様々であったが、彼らの多くは日本でアイデンティティにつ

³ Butsugan (1970: 112) の調査結果によると、当時ブラジルの日系二世の60%が、二世は他のブラジル人とは異なる社会グループを作るべきだと思っている。

いて疑問を持ち、困難を経験した。工夫や努力をしてアイデンティティを明確にしたものの、拒絶された、差別されたという苦い感情を持ち続けている場合もある。居住国で人々が「日本人、○人」などと区別されていたのと同様、日本でも「日本人、外国人」の区別があり、彼らは自分たちがどちらに属するのか、どちらにも属さないのではないかという疑問を持ったのである。自己アイデンティティは青年期の自然な問題とはいえ、個人のアイデンティティを国籍や血統による枠組みだけで捉える見方は、現在の日本社会に根強く存在し⁴、問題を複雑にしている⁵。今後、海外で育つ日本人学生、日本で育った外国籍の学生、または異なる国籍を持つ両親の間に生まれた子どもなどが益々増えることを考えると、アイデンティティの捉え方は留学交流においても検討が急務であろう。

また日系人留学生の中で女性の多くが、日本で差別を経験したと述べている。日系人で女性だと、差別が激しくなるという意見もあった。これは、国籍や血統に加えて、性別によって個人の言動を規定する考えから生じた問題である。

日系人の日本語は、ブラジルでは1960年代から「コロニア語」と呼ばれるような、現地語の語彙や日本の古い語彙が使われるなど特徴のある日本語である⁶。ワインライヒ（1976: 169）は「かなり大きい集団が二つの言語を接触状態に持ち込むと、そこでは言語行動に現れる各自の独自のくせが相殺される傾向がある」と述べているが、筆者の経験でも、日系人の間で使われる日本語は、婉曲表現が少なく直接的であったり、女性言葉が少なくなったりしている。非言語コミュニケーションにおいても、日本で現在でも一般的に女性に期待されるような仕草や姿勢等が、日系人の間では薄れていると感じられる。名前や外見の特徴から日本人だと思われる女性が、日本で「女性らしくない」言動をとる場合、どのように受け入れられたかは、想像に難くない。

現在日本では、本調査の対象者が日本に留学した1960年代～2000年初頭よりは、日系人や外国籍住民な

ど多様な文化背景を持つ人々が多く暮らし、彼らについての知識や理解が深まっていると思われる。ジェンダー平等についての意識も高まりつつある。地域社会や国際社会では、人々が持つ文化の多様性についての理解促進が意識的に行なわれ、差別の解消が謳われている⁷。新しい時代は、日系人元留学生たちが過去に日本で経験したようなアイデンティティに関する疑問や苦勞が、より時代に合ったものになること、そして国籍や血統、外見的特徴、性別等によって人々を不必要に区別することがなくなるのが、社会でも、大学でも、重要な課題であろう。

日本社会に対して批判的な立場をとる元留学生も含めて、多くの対象者たちが、留学後約10年から50年を経た現在、日系人の立場から日本留学の成果を活かして仕事をし、日本のよい面を伝えていこうとしている。日系人ならではの苦勞も多かったが、彼らの留学成果は社会や次世代に繋がれていることが明らかになった。日系人留学生の日系人としての意識も、数十年前と現在とは大きく異なるであろう。ラテンアメリカ以外の地域を出身とする日系人留学生にはまた異なる特徴があるかもしれない。それをふまえたうえで、ラテンアメリカ出身日系人の日本留学を通して見えてきた留学成果の特徴や課題が、今後の国際教育交流においても検討されることが期待される。

同時に、本調査の結果を今後、社会的アイデンティティ理論等によって解釈・分析し、日本が留学生など多様な文化背景を持つ人々とともに社会を作っていくための理論的知見を提供することに繋げたい。

引用文献

- 木下康仁(2007a)『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法－修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂。
- 木下康仁(2007b)「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(MGTA)の分析技法」、『富山大学看護学会誌』第6巻2号, pp.1-10.
- 鐘(たたら)幹八郎(1995)『アイデンティティ研究の展望II』ナカニシヤ出版。

⁴ 例えば、田中(2016: 8-9)が具体的な状況を紹介している。

⁵ 一方、鐘(1995: 15)は西洋社会における研究からアイデンティティ規定要因の歴史の変容を紹介し、先祖との繋がりや性別、身体的特徴といった側面は希薄化していると述べている。

⁶ コロニア語については、半田(1980)などに詳しい。

⁷ 例えば名古屋大学は2018年9月に「個人の尊厳を守り多様な個性を尊重する名古屋大学基本宣言」を制定し、国籍や民族、言語等に基づくあらゆる差別を解消することを宣言している。(<<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/declaration/diversity/index.html>>)

- 日本学生支援機構(2018)「平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果」
(https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2018/index.html)
(2019年2月25日参照)。
- 田中京子(2016)「留学生と大学の国際化～留学生相談担当者の視点から」『名古屋大学国際教育交流センター紀要』第3号。
- 野元菊雄(1969)「ブラジルの日本語」『言語生活』No. 219, 筑摩書房。
- 半田知雄(1980)「ブラジル日系社会における日本語の問題(一, 二, 完)」『言語生活』No.346-348, 筑摩書房。
- 松本アルベルト(2008)「日系人の日本への留学・研修, その意義と将来設計への活用」『ディスカバー・ニッケイ 日本人移民とその子孫』2008年2月7日号 (<http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2008/2/8/nikkei-latino/>) (2019年2月25日参照)。
- ワインライヒ, U.(1976)『言語間の接触－その実態と問題点－』神鳥武彦訳, 岩波書店 (Uriel Weinreich, *Languages in Contact-Findings and Problems*-, Mouton, 1974.)。
- Butsugan Sumi (1980) “Participacao social e tendencia de casamentos interetnicos”, *A Presencia Japonesa no Brasil*, Centro de Estudos Nipo-Brasileiros. (Social Participation and Tendency of Interethnic Marriage, Japanese Presence in Brasil.)
- Tanaka Kyoko (2003) “Estudiantes Provenientes de Latino-america: Su adaptacion a la cultura japonesa y re-adaptacion a su propia cultura”, *La Inmigracion Latinoamericana en Japon*, Universidad de Nagoya. (Students coming from Latin America: Their adaptation to the Japanese culture and re-adaptation to their own culture, The Latin American Immigration to Japan, Nagoya University.)